

2年ぶりのやっただれ祭り、最高の盛り上がり 手作り稲穂竿灯、区外からも注目

中越沖地震があったために2年ぶりに行われた「越後よしかわやっただれ祭り」、すごい盛り上がりでした。参加者は軽く1000人を超えたのではないのでしょうか。子どもと若者がたくさん参加して、どんどん盛り上がりつついくことが実感できる祭りでした。

今回の祭りは10回目、節目の祭りでした。越後よしかわの祭りとして、よしかわを良くしたい、活気あふれたまちにしていきたい、祭りのたびに検討し、充実させていく。今年も、新たな工夫がいくつもあって、参加者がさらに増えました。実行委員会の皆さんの努力には頭が下がります。

最近ブームになってきているチェーンソーカービング、俵に入った米の重量当てクイズなど、ずれも注目を集め、話題になりました。メインの稲穂竿灯は500基にもなりましたが、ペッ

トボトルを使った竿灯の「根本」には刈ったばかりコシヒカリの茎が束になってまかれていました。子ども神輿はこれまでよりも増えて7つの子供会が参加しました。これは今後、どんどん増えていく勢いがありました。

「越後よしかわやっただれ祭り」は吉川で生まれた手作りの新しい祭りです。稲作を土台にして発展してきた吉川の長い歴史をふまえ、稲穂をあらわす竿灯をメインに据え、五穀豊穡を祈願する。吉川ならではの個性があふれ、区内はもちろんのこと、区外からも注目される祭りとして発展してきました。

私たちが大人になっても続いていますように

祭りの将来を考えたなら、子どもたちの支持と

稲穂竿灯と米俵神輿



米の重量当てクイズ



参加は欠かせません。くじ引きや神輿の運行の時に子どもたちの歓声をうれしく感じた人たちがたくさんいました。神輿をかつぎ、練り歩く人たちの姿を稲穂竿灯のそばで見ている時、竿灯に下げられた短冊の言葉が目に入りました。「越後よしかわやっただれ祭り、私たちが大人になっても続いていますように」と書いてあるじゃありませんか。書いたのはおそら

く子どもさんでしよう。胸が熱くなりましただね。

審議を前に（株）杜氏の郷視察

日本共産党議員団は8日、（株）杜氏の郷を訪れ、施設の視察、懇談を行いました。

私は施設については何度も見ているのですが、初めての方は機械化された酒づくりに関心した様子でした。

懇談会では、設立から今日に至るまでの経過



や今後の経営方針について山本支配人から説明を受けた後、率直な意見交換をさせてもらいました。議員団では、議会審議にあたって積極的な資料公開などを要請しました。前号でお知らせしたように、（株）杜氏の郷の経営問題は11日の文教経済常任委員会で審議されます。

記念ラベル話題に

やっただれ祭りの祝酒のラベルが評判です。個性的な「吉川の想い」の字体、写真、素敵ですね。



春よ来い 第九六回 都会のセミ

七月の下旬、ある日の朝のことです。大阪市西中島のホテルを出てまもなくでした。歩いている右手前方から、「ジー、シャツ、シャツ、シャツ、ジー、シャツ、シャツ」という大きな音が聞こえてきます。連続して聞こえてくるので、私には、まるでビルコンクリートの壁を磨いているような音に聞こえました。

近くに工事をしているビルはありませんでした。ひよっとしたら、街路樹に何かがある。そう思っ、すぐそばの木の枝を見上げると、一匹の黒いセミが小枝に下からしがみついて盛んに大きな鳴き声を出していました。音の発生源はセミだったのです。

私は今年、セミの鳴き声をわが家のそばで聞きました。最初に聞こえてきたのはアブラゼミ(※注)の大合唱でした。その後、カナカナゼミ(ヒグラシ)もミンミンゼミも鳴いています。この夏、大阪へ行くまでに鳴き声は耳にしていきましたが、セミの姿をまだ見ていませんでした。いつか出合うだろうと思っていた生き物に、まさか、都会で出合うことになるうとは……。

しばらく街路樹の下からセミの鳴く様子を眺めていると、通りがかりの人が「何をしているのだろう」といった表情をしながら私のそばまでやってきました。背の高い、頭の毛がかなり薄くなった七十代の男性でした。

「アブラゼミが鳴いているんです。ほら、あそこにとまっていますよ」

「いやー、今年、初めてセミの姿を見たいです。家の方で見られるはずなのにね」

私がそこまで言ったら、この男性が、ようやく話しかけてきました。

「こちらの方ではないんですか」

「はい、新潟なんです」

「地震にやられた新潟ですか？」

「はい、柏崎の近くなんです」

私とこの男性との会話はそれだけで終わったのですが、何となく心が落ち着くというか、やさしい気持ちに浸っていく時間のふくらみを感じました。ゆったりとした会話の中で、この男性のやさしさが伝わってきたのです。

私が三十数年ぶりに大阪を訪ねたのはこの日の前日でした。気のせい、電車に乗っていても、街を歩いていても三十数年前とは違った人間の「あらっばさ」を感じていました。何となくせかせかして、落ち着きがなく、こちらが間違っ、他人の足でも踏もうなら、すぐにげんこつが飛んでくる。そんな感じさえたのです。

しかし、そんなイメージはセミと出合い、この男性と会話をすることでどこかへ行ってしまいました。一緒にセミの鳴く姿を見つめ、語り合う。他人から見れば、偶然出会ったとは思われない親しい雰囲気が一瞬のうちにできあがっていました。

大都会での一匹のセミとの出合いで思ったのは、子ども時代の遊びの力です。いまの年配の人たちは、どこに住んでいようと、セミを求めて遊んだ思い出を持っていません。セミを追い求めた体験が心の奥深くに蓄積して、人間の心をこれほど和らげてくれるなんて……。小さな事かも知れませんが、うれしい出来事でした。

※私が大阪で出合ったセミは調べたところ、アブラゼミではなくクマゼミでした。

土木費全国4位、民生費47位の県政を変えよう

人間を使い捨てにする派遣労働などが広がって、貧困と格差が顕著になっている。ガソリンをはじめとした物価高は上昇中。医療制度の改悪などで負担が増えた。「もう我慢も限界だ」「こんな社会でいいのか」という怒りの声が県内でも広がっています。

こうしたなか、「民主県政を実現する新潟県みんなの会」の地域・団体代表者会議が7日、新潟市で行われ、参加してきました。

この会議では、同会の県政改革マニフェスト

(案)が示されました。県民の暮らし再生に向けた「2つの転換」と4つのプランです。2つの転換の1つは、福祉予算全国最低の県政を転換し、格差と貧困対策、医師不足解消、医療と福祉、教育の充実を図ることです。いまひとつは、産業政策のゆがみをただし、地場産業・中小企業、農林業を重視し地域経済と雇用確保の政治への転換です。

この日の説明の中で、全国の都道府県の06年度の決算データ比較数値が初めて明らかにされました。それによれば、新潟県の土木費は全国で4位、民生費は47位となっています。泉田知事の福祉軽視の姿勢を数字の上でも確認できた参加者は怒りの声をあげていました。

参加者の発言では、「県民の間に広がる格差問題の存在を認めず、あるのは格差意識だ(と強弁してきた)」「パフォーマンスが強くて、真に県民の願いに応えようとしていない」などの批判が相次ぎました。県政の転換を急ぎたい。



【ヤブカンゾウ】悲恋の花。万葉の時代から「忘れ草」として知られています。花を咲かせても実をつけることはありません。

